

小説 獵奇王

川崎ゆきお



小説 獵奇王

川崎ゆきお

「見たわけではない。申し訳ないがな」

沢村探偵は遠い目をした。その視線は天井にぶつかった。汚れていた。西調布の六畳一間の安アパート。既に昼前だが、沢村探偵は、まだ眠そうな顔をしている。

「それでは、怪人に近い人を見たとかの話はありませんか」

沢村探偵はもう一度名刺を見た。

「木下喜一……フリーライター。これだけじゃ何のことかわからんじゃ

ないか」

「先ほども説明しましたとおり、昭和初期の怪人についての特集記事を組みますので、当時活躍なさっていた沢村さんに、ぜひ昔の思い出とかを……」

木下がこの説明をするのは二度目だ。

「木下さんとやら。あんた、怪人怪人というが、怪人ってなんだね」

「それはもう怪人二十面相とかに代表される……」

「そんなものはね……………」

「雑誌に掲載するためです」

「当然存在しないと思いますよ。で

「強引だね」

すが、そういう雰囲気の人がいたと

「……………内容がですか？」

思うんですね」

「あんだ、興味あるのかね……………怪人

「いたかもしれんな。で、木下さん

に」

といったかね？」

「多方面に興味を抱いています。好

「はい」

奇心だけで生きています」

「あんだ幾つだね？」

「もっと狭い範囲を好きになってほ

「三十二です」

しいね」

「大の大人だ。その大の大人がどう

「でも、僕は比較的怪人とか探偵と

して怪人の取材などしておるのです

かは好きなんです。子供の頃は私立

かな」

探偵になりたかったほどです。だか

ら、今日、本物の探偵に出会えて興

興味を引くとは思えんよ」

奮しているのです」

沢村探偵は冷蔵庫を開け、ウーロ

「誰にでもそんなことをいつておる

ン茶の缶を取り出した。

んじゃないのかね」

「悪いが君の分はない。一本しか買

「正直な話、探偵は好きです」

つてないんだ。寝起きでね。これを

「年寄りを喜ばせるのが上手いね。

飲まんことには目が覚めないんだよ。

だがね木下さん。わしは怪人と出会

悪いがいただくよ」

つてはおらん。だから、君が聞きた

「どうぞ、お構いなく」

がつておる話はできない。わかるね。

「ところで、君はどうして、怪人の

それに、怪人を見たことがあるかつ

特集をやろうと考えたんじゃ。その

て質問自体、おかしいとは思わんか

発想を知りたいな」

ね。いくら読み物記事でも、読者は

「だから、子供の頃から興味があつ

て、同じように興味を持って人が読者の中にもいると思ひまして、それで始めたわけです」

「始めるつて……何を」

「記事を書くことです」

「そういうのを始めるといふのか。」

単に文字を書くだけじゃろ。何も現

実は変わりはせん。そうじゃろ」

「でも、僕の仕事の現実は動きま

す」

「なるほど」

「協力してもらいたいのです」

「結局は君個人の仕事の手伝いをするわけか。で、誰が読む？ 読んで何のメリットがある。単に君の収入を増やすだけの仕事ではないか。そうじゃろ」

「世間一般に紹介して……」

「あんた何を考えておるんだ。そんな存在もせん怪人のことを知っても役には立たんじゃろ。要するに、あんた自身の所得の問題だけの現実なんじゃ。単にあんた個人の展開で、他人を巻き込むんじやない」

「どうも、僕は口下手で上手く説明
できなかつたようです」

「わしは寝起きが悪いんじや。単に
それだけじや」

「で、お話は、やはりしていただい
ないのですか」

「この場所じやね……。わしの境遇
はこの部屋を見ればわかるじやろ。

単に老人の愚痴を喋るだけじや。だ
が、わしもまだ現役の探偵だ。何か
の広告になるやもしれん。わしの名
前と連絡先とかを掲載してくれるか

ね。つまりその雑誌を見た読者から、

仕事の依頼が来る可能性を見いだせ
るかということじやな。その程度の
うま味がなければ、何も喋らんぞ。

人は興味や趣味だけで動くものでは
ない」

「わかりました。沢村探偵の紹介も
させて頂き、事務所の連絡先も明記
します」

「その調子じや。ここはアパートじ
やが、事務所として受け取ってほし
い。わかるね」

「あの、よろしければ、喫茶店とかでお話を」

「こんなむさ苦しい一人暮らしの老人の部屋にいるのが嫌なんじゃろ」

木下喜一と沢村探偵はアパートの玄関を出た。横に煙突がポツンと立っている。銭湯の煙突だが、四年前に廃業している。

二人は西調布の駅前まで歩いた。

そこまで出ないと喫茶店はない。

「この店は夕方からスナックになりよる。恐ろしい世の中じゃ」

沢村探偵は喫茶タンゴのボックス

席に座るなり、嫌味をいった。奥のカウンターに聞こえたのはいうまでもない。カウンターには年輩のママさんがいた。彼女も寝起きらしく、まだ化粧をしていない。

「なになさいます」

カウンターからいきなり注文を聞いてきた。

「ばあさん。お冷やおしぼりが先じゃろ」

「あとで持って行きます」

「コーヒー二つくださいな」

木下が注文する。

「あんた、早計だよ。わしはアイス

コーヒーが飲みたいんだ」

「すみません。ホット一つとアイス

コーヒー一つ」

「ホット二つじゃないの？ お爺さ

ん、ホットにしなさいよ。冷たいも

のは体に毒ですよ」

「黙れババア。この前、わしにビー

ルを次々に運んで来たのは貴様じゃ

ないか。わしは注文もしておらんの

に……。木下さん、この店のババア

こそ怪人じゃ。他を探す必要もない

わい」

「いいじゃないですか。そういつて

好き勝手なことを遠慮なく喋りあえ

る関係つて、僕は懂れますよ」

「あんたは現実を知らんから、そん

な悠長なことがいえるのじゃ」

「そういえば探偵はハードなんでし

たね」

「まさに現実の恥部の中を泳いでお

るようなものじゃ」

「それ、コピーに使えますよ」

「何を複写するのじゃ」

沢村探偵は運ばれて来たアイスコ

ーヒーに生クリームをスロンと注いだ。

「ババア、また古いクリームを使うとるな」

「新しいですよ。だからフレッシュというんじゃないの」

「嘘をつけ、上手く溶けんではないか。分解せんで。古い証拠じゃ。これは腐っておる」

「大丈夫、飲める飲める。その状態

はまだ腐っていないから大丈夫よお爺ちゃん」

「それで、ですね……」

木下が切り出す。

「怪人の話か？」

「沢村さんは現役時代、変わった事件はありませんでしたか」

「待てい。わしはまだ現役じゃ。引退はしておらん」

「失礼しました」

「あんたはわしのことを非常にリア

ルに見ておるな。だが、その視線がわしをどれだけ傷つけておるのか気付かんのか。若いので無理もない。

それにわしは有名ではないし、金もないし、威圧感もない。単なる老いぼれじゃ。わし自身、こんな老後になるとは思ってはおらなんだ。わしも子供の頃、あんたと同じように探偵になる夢を見た。そして探偵になった。そしてその末路がこれじゃ」「それほど悪くはないと思います
が」

「あんた、わしに憧れるか？」

木下は一瞬言葉に詰まった。

「憧れてもいいような気がします」

「難しい言い回しをするな」

「雰囲気です。沢村さんの雰囲気も

悪くはないと感じたからです」

「君には将来がある。夢もある。その夢はわしのこの生活ではないはず

じゃ」

「ですが、そうなくてもいいんじゃないか、と思うんですね」

「人生に失敗する快楽をあんたは楽

しめる男じゃな」

「ええ」

「三十を過ぎると、おおよそ人生の輪郭がわかるはずじゃ。あんたも己の限界を見た口か」

「同じだと思います。僕はフリーライターで、自由業なんです。探偵と近い境遇です」

「ライターはタバコに火をつける。人の心に火をつけるのがライターじゃ。あんたは自由に火をつけるポジションにおけるわけじゃ」

「沢村さんは詩人ですな」

「その甘さが人生を狂わせた」

「僕はどうでしょうか？」

「あんたも危ない。怪人の取材など本気ですべきではない。興味を持つてすべきではない。軽く流す程度でいい。あんたは本気で知りたがっておる。危険じゃ。そんなことで本気になるでない」

「僕は軽く流すつもりです。気楽な読み物記事ですから」

「そうとも、存在するわけもない怪

人など、掴みどころがないのじゃかならな」

「沢村さんは怪人とは何だと思います」

「単に妖しい奴のことじゃ。言葉の上だけの存在で、怪人という職業はないし、また、実在もない」

「怪盗ルパンとか。怪人二十面相とか、オペラ座の怪人とかがありますね」

「それは読み物じゃ」
「でも、何らかのモデルがいたので

はないのですか」

「そのモデルもフィクションじゃ。

原型そのものが幻想なのじゃよ。そして逆に絵物語の虚構の人物を現実の人間が真似ておるだけなのじゃ」
「真似てる人を見たことがあるのですか」

「怪人など見たことはないといっておる」

「でも、それに近い人は……」

「わしは見たことはないがな、聞いたことはある……噂にすぎんがな」

「どんな噂ですか」

「噂は噂じゃ。その噂自体、実態があるとは思えん」

「どんな噂を聞かれたのか、教えてもらえませんか」

「あんたのいちばん聞き出したいネタだろ」

「はい」

「だが、眠くなるぞ。それにそれはヨタ話で、聞いても白けるだけじゃ」

「かまいません。聞かせてください」

「い」

「くだいな、ホラ話だといっておるのに……そんなものでは記事にならんぞ」

「かまいません」

沢村探偵は、一呼吸おいてから、喋り始めた。

「二十面相の手下だと名乗る男がいた」

「……………」

「続けるか？ この種の話は出鱈目だ。だるくなるだけじゃ」

「続けてください」

木下は精一杯真摯な眼差しを沢村に向けた。

「馬鹿な奴だ」

「続けてください」

「その男が二十面相の遺産である古美術品を闇で売っていた」

「二十面相は実在していたのです

ね」

「冗談でもそんな質問はやめなさい」

い」

「いや、そうじゃなくて二十面相的

な人が存在していたのでしょ。作者

の江戸川乱歩は二十面相のイメージをそこから得たのですよ」

「怪盗ルパンから得たんじゃ」

「怪盗と、怪人とは違いますね」

「そんなことで厳密にならんでよろしい」

「でも、何らかのモデル的な人がい

たとは思いませんか。昭和初期には

様々な謎があります。窺い知れない

世界が多かったと思います。今のよ

うに情報が行き渡りにくい時代でし

たし、戦争もあったし」

沢村探偵は咳払いを一つした。

「話を続けるかね」

「ぜひ」

「二十面相の手下だと自称する男は、当然常識から考えて嘘じゃ。流れて来た古美術品を闇で売っていただけじゃ。この種の噂はよくある」

「でも、何処から流れて来たのでし

ようね……その古美術品」

「うむ……。彼が持っていたのは日

本のもではなかった」

「外国から流れて来ていたのですか」

「中国」

「はあ」

「清朝の紫禁城にあったものじゃ。わかるな。よくあるミステリーだということが。それすらも嘘なのじゃ」

「幻惑されますね」

「危ない世界じゃ」

「その男はどうになりました」

「古美術を売って儲けたよ。単にそ

れだけの話じゃ」

「二十面相の手下だったんでしょ」

「そういう嘘が噂になって狭い範囲に広がった……。単にそれだけじゃ。

そこには怪人など存在せん」

沢村探偵は、ストローでアイスコ

ーヒーを攪拌した。

「符丁のようなものですね。怪人と

は」

「つまりは、実態など最初からない

わけじゃ」

「参考になりました」

「嘘をつけ。もっと具体的なネタが

ほしかったんだろ」

「いえ、具体的な名前が出ると、怪人が怪人でなくなりますから」

「あんたは、見所がある。そのとお

りじゃ」

「軍部とかが暗躍してたのでしょ。

おそらくそんなルートがあったのか

もしれませんね」

「それを言い出すと、リアルになっ

てしまう。怪人こそがいちばんリアル

な人間じゃというパラドックスに

なる」

「そうですね」

客が入って来た。ママさんはカウ
ンターで居眠りをしている。

「婆さん。客だよ」

沢村探偵の声でママさんは目を開
ける。

入って来た客を見て、沢村探偵は
出かかった声を呑んだ。一人は忍者
の格好、そしてもう一人は仮面をし
ていた。その仮面は二十面相の古い
挿し絵でお馴染みのものだった。